

修士論文（要旨）

2010年7月

高齢者の宗教行動とその関連要因

指導 長田久雄 教授

老年学研究科

老年学専攻

208J6010

馮 臻

目 次

I はじめに

II 先行研究

1. 定義
2. 海外研究
3. 国内研究

III 研究の目的と意義

1. 研究の目的
2. 研究の意義
3. 仮説

II 方法

1. 調査対象
2. 調査時期
3. 調査方法
4. 調査項目

III 結果 & IV 考察

1. 基本属性と宗教行動との関連
2. 宗教的基本属性と宗教行動との関連
3. 主観的健康感と宗教行動との関連
4. 精神的健康と宗教行動との関連

I はじめに

日本には無宗教者が多いと言われている。しかし、八百万の神々が存在していることを信じ、多神に心を寄せる重層信仰も定着されている。ゆえに、日本人の大多数は、実際にはいわゆる宗教儀礼に参加するが、特定の宗教組織に対する帰属意識は薄いと考えられる。しかし、重層信仰を持っている日本人の「行としての宗教」つまり日常日頃の「宗教行動」は、どのようなものなのだろう。

II 先行文献

1. 定義

宗教学辞典¹³⁾によれば、ジョンソン、今田、宇野、リューバらは、宗教行動を外から観察できる身体的行動のみを指すものとして用いている。

2. 海外研究

Gartner, Larson, Allen¹⁵⁾は、宗教と精神的健康との関連について200以上の研究をレビューし、宗教への関与が高いほど、健康状態がよく、幸福感および結婚満足が高く、死亡率や自殺、薬物の乱用、飲酒、犯罪、抑うつが低いことを示している。

3. 国内研究

小谷²³⁾は、神仏を信じる人が、高齢の人の方が若年者に比べ顕著に多く、お祈りや、お勤めといった自己修養的宗教行動を多くしていたことも示している。

III 研究の目的と意義

1. 研究の目的

本研究の目的は、日本人の高齢者の宗教行動の実態を把握し、宗教行動とその関連する要因を検討することである。

2. 意義

人生の衰退期とも言われる高齢期に行われる宗教行動は、高齢者にとってどのような役割を果たしているのを解明することによって、様々な宗教行動が、加齢による心身の不安やストレスを感じない安定した情緒を維持すること、そして、物事を前向きに考え、幸福感に溢れた人生を味わうことに寄与すると考えられる。

II 方法

1. 調査対象：A県の生涯大学の受講生であった。

2. 調査方法：自記式質問紙、留め置き法で実施した。調査は2009年9月～10月。

3. 調査項目：宗教的基本属性(6項目)①宗教に対するイメージ、②宗教に関心を持っているか、③宗教の有無、④信仰している宗派、⑤主観的信仰感、⑥信仰期間。宗教行動に関しては、宗教行動尺度(14項目)と宗教行動に関する質問(8項目)。主観的幸福感の指標として改訂版PGCモラル・スケール、抑うつの指標としてGDS日本語版。その他に主観的健康感、及び基本属性。

III 結果 & IV 考察

1. 宗教行動と基本属性との関連

a. 性別、家族構成による宗教行動の差がみられなかった。それは、性別及び家族構成は宗教行動とは関連しないと考えられる。

b. 宗教行動と年齢との関連

年齢と宗教行動との関連を検討した結果、正の相関を示した。この結果は金児²⁷⁾の先行研究をサポートしている。金児は、慰霊的行動にも、自己修養的行動にも加齢の効果は認められ、特に、自己修養的行動にはこの加齢の効果が顕著であると述べている。また、高齢になっ

て、親や配偶者や身の周りの人を亡くすという経験を契機に自己の人生を振り返らざるをえないこと、そうした自己のアイデンティティの再確認・再確立を迫られることが大いに関与していると指摘している。しかし、本研究はサンプル数が少ないことや、対象者は比較的年齢の若く健康な人であることから、高齢者の全体像を示せたとは言えない。今後、後期高齢者を含めた検討が必要である。

c. 最終学歴と宗教行動との関連では、学歴の低い人は現世利益的行動をよく取ることが示された。

d. 経済状況と宗教行動との関連では、経済状況の良好な人ほど、現世利益的行動得点が高いことが示された。この結果は、経済状況が良好の人は、現在の豊かな経済環境のなかに居られるのは、単に自分の努力ではなく、神仏からの守りや周りの人からの支えが必要だと考えられる。

2. 宗教行動と宗教的基本属性との関連

宗教に対するイメージが良い人、宗教への関心がある人、宗教信者及び主観的信仰感が強い人のほうが宗教行動をよく取ることが示された。この結果は、宗教に好意的な態度を持つ人や信仰感強い人は、様々な宗教行動を通じて、自分の悩みや不安が癒され、喜びや生きがいを感じられたとき、宗教により近づくため、宗教行動を頻繁に取ると考えられる。

3. 宗教行動と主観的健康感との関連

主観的健康感と宗教行動との関連では、健康な人の方が、宗教行動総合得点及び慰霊的行動得点、自己修養的行動得点が有意に高かった。日々神様や仏様を信心して祈るような自己修養的行動によって、いつか願いが叶うと信じていると考えられる。

4. 宗教行動と精神的健康との関連

精神的健康と宗教行動との関連について、主観的幸福感と宗教行動との関連では、宗教行動の下位因子である「慰霊的行動」と主観的幸福感の下位因子である「孤独感」との間に正の相関を示した。このことから、墓参りをしたり、先祖供養をしたりすることで、先祖の霊に加護してもらおうと感じ、孤独感を癒され、主観的幸福感の向上に結ぶと示唆される。また、抑うつと宗教行動総合得点との間に有意な弱い負の相関が見られた。このことから、うつ傾向が少ない人は宗教行動を取る余力があり、その余力が次の宗教行動に向かわせ、精神的健康がさらに促されると推測される。

引用文献

- 1) 統計数理研究所：7ヶ国価値観調査 <http://www.ism.ac.jp/~yoshino/arito/>
- 2) 金児暁嗣：『日本人の宗教性：オカゲとタタリの社会心理学』新曜社 1997
- 3) Koenig, H. G., Kvale, J. N., & Ferrel, C. (1988). Religion and Well-Being in Later Life. *The Gerontologist*, 28, 18-28.
- 4) Argyle, M. (1987). *The Psychology of Happiness*. London: Methuen.
石田梅南（訳）：『幸福の心理学』誠信書房 1994
- 5) Krause N. (2004). An Introduction to Research on Religion, Aging, and Health: Exploring New Prospects and Key, Challenges. In K.W. Schaie, N. Krause & A. Booth, *Religious Influences on Health and Well-Being in the Elderly* (1-19). New York, NY: Springer Publishing Company.
- 6) 金児暁嗣：「日本人の民俗宗教性とその伝播」『心理学評論』新曜社，36(3)，460-496，1993
- 7) 張日昇，高木秀明：大学生の宗教態度と宗教観に関する日中比較研究，横浜国立大学教育紀要，29，1989
- 8) 渡部美穂子，金児暁嗣：都市は人の心と社会を疲弊させるか？都市文化研究，3，97-117 2004
- 9) 金児恵：日本人の宗教的態度とその精神的健康への影響：ISSP 調査の日米データの二次分析から，死生学研究，3，348-367，2004
- 10) 松島公望：キリスト教における「宗教性」の発達および援助行動との関連：キリスト教主義学校生徒を中心にして，発達心理学研究，17，3，2006
- 11) 松島公望：日本人クリスチャンにおける宗教意識尺度の開発：プロテスタント教会一教派(ホーリネス教会)を対象にして，学校教育学研究論集，11，東京学芸大学，13-28，2005
- 12) 谷芳恵：大学生の宗教観と幸福感に関する心理学的研究，神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要，1，1，2007
- 13) 岸本英夫：『宗教学』大明堂 1961
- 14) 小口偉一，堀一郎：『宗教学辞典』東京大学出版会 1973
- 15) Garner, J., Larson, D.B., & Allen, G.D. (1991). Religious commitment and mental health: A review of the empirical literature. *Journal of Psychology and Theology*, 19, 6-25.
- 16) George, S. T., & McNamara, P.H. (1984). Religion, race, and Psychological Well-being. *Journal for the Scientific Study of Religion*, 23, 351-363.
- 17) Nguyen, T. S. (2007). Vietnamese elderly: Life satisfaction, spirituality, religiosity, and other correlates. California State University, Long Beach.
- 18) Neal, K. (1995). Religiosity and Self-Esteem among Older Adults. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, 50B, 5, 236-246.
- 19) NHK 放送文化研究所：データブック 全国県民意識調査 1996，日本放送出版協会，1996
- 20) 四国新聞社：どう読む「豊かさ指標」1998
<http://www.shikoku-np.co.jp/feature/tuiseki/017/>
- 21) 金児暁嗣：「宗教と心理的充足感」濱口恵俊（編）『世界のなかの日本型システム』新曜社，1998

- 22) 口羽益生・舟橋和夫：日本人の宗教意識と社会的実践 - 特に浄土真宗の門信徒を中心に - 仁愛大学研究紀要, 2, 2003
- 23) 小谷みどり：日常生活における宗教的行動と意識, 第一生命レポート, 7, 2007
- 24) 松林公蔵, 赤松功雄, 和田泰三他：福祉ホーム入居高齢者の日常生活機能, うつと QOL - ミャンマーの宗教系ホームと日本の養護老人ホームにおける比較検討 -, 京都大学東南アジア研究所 東南アジア研究, 45, 3, 480-494, 2007
- 25) 前田大作, 浅野仁, 谷口和江：老人の主観的幸福感の研究—モラール・スケールによる測定を試み—, 社会老年学, 11, 15-31, 1979
- 26) 新野直明：高齢者の精神的健康度をどうみるか—GDS 指標の使い方を中心に—, 生活教育, 44, 8, 2000
- 27) 金児暁嗣：日本における近代の価値観と宗教意識の変質, 都市文化研究, 1, 23-35, 2003
- 28) Levin, J. S., & Schiller, P. L. (1987). Is There a Religious Factor in Health? *Journal of religion and health*, 26, 9-36.